



発行所
社団法人 国民文化研究会
(九州←→東京←→全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

紫陽花に思ふ

教育再建は親の背中から

森田仁士

今年も庭の片隅に一株の紫陽花が、赤紫色の花房をしっかりと咲かせた。義母に代り庭の草取りをするやうになつて数年になるが、幾つかの発見があつた。最初は紫陽花であつた。紫陽花の根元には雑草が少なく、生えても簡単に抜ける。特段の手入れなどせずとも、毎年美しく咲く。

これに対し、私の作る今風の花壇は、手間がかかるのに何とも冴えない。土と陽当たりが良ければ何でも育つと思つてゐたが、実際は何を植ゑるかの選択が大切であつた。適さないものは、いつの間にか雑草に負けてゐる。義母の庭のやうに簡単な手入れで毎年美しく調和して咲くやうになるためには、数十年の手入れの積み重ねが必要なのであらう。

近年、教育の荒廃が喧しく論じられてゐる。おそらく「子供にぴつたりと合つた株を見つけて育てる教育を」と云へば、大方の賛同は得られるであらう。だが、「子供達の心のもとなる種子を播き苗を植ゑよう」と云へば、「子供の個性・主体性を大切に」とか「種子を他人が選別することは思想の自由からも許されない」、さらには「子供は無限の可能性を秘めてゐる。芽吹くまで愛情を持って見守れば良いのだ」等と叫ばれるのではなからうか。

教育的な環境が良いに越したことはない。しかし、肥えた土と陽当たりを確保しても育つべき確かな苗がなければ、雑草が蔓延るばかりであらう。今日の教育は、この草取りに膨大な努力が費やされてゐるやうに思はれる。しかも、個性や自由の名の下に、この草取りにも規制が掛かる。ましてや種子を選ぶとなれば、算数・理科など科学知識の種は播かれても、愛国心論議に示されるやうに、「心を育てる」道徳や歴史の教育には妙な制約がかけられてしまふ。

櫻井よしこ著『日本の危機』収録の「教育荒廃の元凶は親と日教組にあり」に感銘を受けた。女史は、悪しき平等観と、はき違へた自由と権利により、子供に責任や思ひやりを教へることが出来なくなり、人格形成の教育は完全に失敗したと分析する。さらに、その原因のひとつが親の歪んだ愛であり、これが子供を限りなくエゴイストに育ててゐると指摘する。女史は最後にかう述べる。

「文部省も日教組も教育の荒廃の責めを負うべきだ。だが、両親の姿もまた、いま、かつてないほど厳しく問われている。そしてそれは、他の誰でもない、私たち一人一人への最も鋭い批判であり問いかけてあることを肝に銘じなければならぬ」

女史は読者に問ひかける。「あなたの子供に伝へたい種子は何ですか、あなたが子供に伝へたい種子は何ですか、

あなたの生き様を子供達はじつと見ているのですよ」と。

他者への批判は容易い。優れた環境が与へられないのは社会・政治の所為だと責任を他に転嫁する。この思考に見える卑怯と甘えから、抜出すことが教育の第一歩であらう。そして、親である私達が求める花、すなはち「人間にとって価値とは何か」を静かに自問自答しなければならぬ。

私達の祖父は、「まごころ」によつてのみ「人間の価値」は量られると喝破し、片田舎の名もない石工に「虚栄の心なき忠実なる勤労の生の貴さ」を見て人生の鑑とした(河村幹雄著『名も無き民のこころ』)。

ところが、「人間の価値」は地位や財産によつて量られるものではないにもかかはらず、現代の教育は平等と人権を強調して教へる。

物とお金が溢れる中で、心を正すことには覚悟が必要である。親が、栄達に心を奪はれることなく、自分に与へられた仕事に誠実に力を尽す、その後ろ姿を見せるところから、「血の繋がる親子」は「心を相続する親子」になつていくと信する者である。

(北九州市立医療センター勤務放射線技師 数へ五十一歳)